

ガツタつ子の原風景

代表理事 青木 厚志

人には誰しも、心の中に原風景というものが存在するらしい。

その原風景という形なきものは、ともすると人の人生を左右するほど人の成長に深く関わり、と論ずる学者もいると聞く。その形なきものは、それぞれの人の青少年期に、身の回りにあった、あるいは出会った風景といったところであろうか。

であるならば、この自分にもそれに類するものがあるのではないかと思い、目を閉じて少年期に思いを巡らせてみた。すると、何やら懐かしくもあり、恥ずかしくもあり、怪しげでもあり、といった様々な風景が浮かんできた。

私が少年期を過ごした昭和中期の武蔵野台地には、それなりに子ども達がワルサをする空間が残っていた。悪友が集まり、人にはとても言えない、時の親が聞いたらひっくり返るような悪戯いたずらをして大笑いした風景、夕方に響く豆腐売りのラッパが、遊びを終えるための終鈴（チャイム）に聞こえた風景、学校の授業は際限なく退屈で、給食と休み時間にしか楽しみを見いだせなかった風景。

こう並べてみると、私にはどうも「ガッタ小僧」の原風景が多くを占めているようである。しかし、これではよろしくない。なぜなら、前述の学者先生方の論に準ずるとすれば、これらはとても今の自分を人前で語るに値する原風景とはかけ離れているからである。

少なくとも人前で「子ども達の心には、自然の中で原風景を描くことが大切」といった講釈を述べるには甚だ恥ずかしく、かつ学者先生たちが期待し述べるところの原風景とは全くもって相反するものとなってしまう。これはまずい……そう思って、再度思いを巡らせてみると、そう、出てきたのである、人前で語れそうな原風景が。

それは小学四年生の夏休みのことだった。

私は初めて信州八坂村（大町市）を訪れた。当時の八坂村はツヅラ折れの細い急坂を登り、車一台がやっと通れるような峠のトンネルを抜けた先にあつた。

私は、そのトンネルを抜けた先に見えた、真つ青な夏空と、モクモクと湧き出てくる入道雲、そして強烈なまでに私の鼻を覆つた夏草の匂い、それを思い出したのである。

これはまさに私の心の中に深く刻み込まれた、いわゆる本物の自然との出会いとでもいった風景である。これであれば、今の私の仕事と結びついているものとして、人前で講釈でき、いわゆる学者先生たちの論とも整合性がとれる。これで私は少し安堵した。

しかしである。ガツタな原風景もやはり捨てがたい、どちらかというところの方が、どうも自分に正直なような気もする。そこで私は考えてみた。

それは、原風景には二種類あつて、言うなれば一つは善玉原風景、もう一つは秘密の懐かしさを伴つたガツタ原風景であり、ともにこの二つは自らの体験に基づいたもので形作られていて、忘れがたいものであるということである。そして、この善玉とガツタ（悪玉）が折り重なって、人は成長し、大人になって原風景を語れるようになると思うのである。

人には誰しも、口に出せないガッタ原風景があると思うし、今の子ども達にはたくさんのガッタ風景を描いてほしいと思う。なぜならば、善玉風景はガッタな風景があつてこそ、生き生きと鮮明に心に刻まれると思うからなのである。

今を生きる我々大人達ができること。それは、小さな画家達が、法にふれない程度のガッタ風景をおもいきり描ける時間と空間、そしてそれらを温かく見守れるような地域、社会を環境として作り出していくことなのではないか、と心から思うこの頃である。

*ガッタっ子——信州の方言。総じて大人のモラルに合わないことをしでかす子どもをいう。

あおき・あつし

公益財団法人育てる会 代表理事。大学卒業後、東京都社会福祉協議会に入職。児童福祉関係施設、中国残留日本人孤児対策室担当として七年勤務。その後、育てる会に入職。企画総合主幹として各地の山村留学事業立ち上げを担当。事務局長を経て現職。趣味特技・アルペンスキー（SAJ指導員・A級検定員）、セーリング、読書、旧車、オートバイ、ソルトルアー、野鳥観察。